

サルコイドーシス分科会報告

研究分担者 今野哲（北海道大学教授）

研究要旨

【背景と目的】肺サルコイドーシス（サ症）の治療指針における導入は、プレドニゾロン（PSL）換算で 30mg/日相当とされているがそのエビデンスは乏しい。一方でステロイドの低用量投与の是非も明らかではなく、低用量のステロイドで治療開始した症例の特徴を後方視的に検討することを目的とする。【結果】2017 年 9 月現在、北海道大学病院、JR 札幌病院、新宿海上ビル診療所に定期通院中の肺サ症患者において、低用量のステロイド（PSL 換算 10mg/日以下）で治療開始された 22 症例の臨床的特徴を後方視的に調査した。22 症例中、男性 8 名（36.4%）、女性 14 名（63.6%）であり、発症年齢と治療開始年齢の中央値はそれぞれ 35.5 歳、43 歳であった。ステロイドを離脱できたのは 5 例（22.7%）であった。また、PSL 換算で 5mg/日の症例は 8 例であり、男性 3 名（37.5%）、女性 5 名（62.5%）であった。発症年齢と治療開始年齢の中央値はそれぞれ、27.5 歳、38 歳であり、ステロイドを離脱できたのは 3 例（37.5%）であった。【結論】肺サ症においてステロイドを導入する際、治療指針の記載よりも低用量で十分な効果を示す可能性がある。

A. 研究目的

サルコイドーシスは原因不明の全身性の肉芽腫性疾患であるが、その臨床経過は、自然寛解する例から増悪により全身性ステロイドが必要となる症例まで、多様である(1-3)。本邦における治療指針では、プレドニゾロン（PSL）30mg 相当での導入が記載されているが、そのエビデンスは乏しい。一方でステロイド低用量投与の是非も明らかではないが、低用量ステロイドで効果がある症例もみられる。そこで、肺サルコイドーシスに対して低用量ステロイドで治療開始した症例の特徴を後方視的に検討することを目的とする。

B. 研究方法

下記を満たす症例の臨床的特徴を、後方視的に調査した。

・2017 年 9 月 30 日現在、以下の 3 施設に定期通院中

北海道大学病院 内科 (N=11)

JR 札幌病院 呼吸器内科 (N=26)

新宿海上ビル診療所 呼吸器科 (N=30)

- ・病理組織学的に、サルコイドーシスと確定診断されている
- ・治療開始時のステロイド投与量が確認できる
- ・経過中、低用量のステロイド（PSL 換算 10mg/day 以下）で治療開始されている

C. 結果

22 症例中、男性 8 名（36.4%）、女性 14 名（63.6%）であり、発症年齢と治療開始年齢の中央値はそれぞれ 35.5 歳、43 歳であった。ステロイドを離脱でき

たのは 5 例（22.7%）であった。PSL 換算で 5mg/日の症例は 8 例であり、男性 3 名（37.5%）、女性 5 名（62.5%）であった。発症年齢と治療開始年齢の中央値はそれぞれ、27.5 歳、38 歳であり、ステロイドを離脱できたのは 3 例（37.5%）であった。

D. 考察

少量ステロイドによる導入が適当な症例としては、症状がそれほど強くなく、また肺野の線維化が少なく、進行が緩徐、肺機能が保たれている症例が考えられる。また、本来 PSL30mg 相当が妥当であるが、ステロイド忌避例も適当であると考えられる。

E. 文献

1. Sugisaki K, et al. Sarcoidosis Vasc Diffuse Lung Dis 2003
2. Nagai S, et al. Clin Chest Med 2008
3. Hattori T, et al. Respirology 2017

F. 健康危険情報：なし

G. 研究発表

1. 論文発表：なし
  2. 学会発表
- 1) 木村孔一，今野哲，四十坊典晴，山田嘉仁，山口哲生．低用量でステロイド導入した肺サルコイドーシス症の検討．第 38 回 日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会総会

H. 知的財産権の出願・登録状況：なし